

蝉衣に吹く風

仲宗根恵達は古い知人の告別式に参列した。弔問客はそれほど多くない。花輪の並んだ故人の家の中から読経のひくい声と線香のにおいが、最後尾の仲宗根のところまで流れてきた。

下地源位。母親から電話で故人のその名前を聞いた時、まったく本人に思い至らなかった。

源おじさん。そう聞いてはじめて思い出したのだった。源おじさんは三十年ほど前に亡くなった父親の恵順の飲み友達だった。

二代続く宮古上布の職人だった父親は寡黙な人で、酒が入ってもふだんよりすこし口数が多くなる程度だったが、おじさんの飲み方は陽気で、興がのると、島伝統のクイチャー（踊り）を自分流にアレンジした奇妙なダンスを披露して母親や仲宗根や姉の朋美を笑わせたものだ。

おじさんの遺影は晩年のものらしく、記憶とはだいぶ違っていた。それでも、尖った頬

骨と先のくいと曲がった鼻をみとめて、あ、源おじさんだ、と仲宗根は思った。懐かしさと淡い悲しみが胸に広がった。

用事でこられなかった母親のぶんも香典を供えて手を合わせ、返しを受け取って近くの空き地にとめておいた車へむかった。街はずれのこの辺りは緑に囲まれている。木麻黄の木立の間をすこし急ぎ足で歩く。

おじさんはむかしのようにまた、父親とむこうで酒を酌み交わしているだろうな。

折り畳み式の小さな飯台を挟んで、差しむかいで酒を飲む父親と源おじさんが瞼の奥に蘇る。場所は実家の東の庭に面した縁側。母親の意向でそこが酒座と決められていた。

縁側の引き戸は、雨の降る寒い冬の夜でもわずかであれ必ず開かれていた。ヘビースモーカーの二人が、飲みながらずっとはき出している煙を室外に追い出してやるためだ。

おじさんは隣家にまで届きそうな大きな甲高い声で冗談を言い、下の話しもも平気でした。

「恵達、もう下の毛生えてるか？」

夏の暑い晩、刺身の皿をのせた盆を運んで行くと、おじさんは派手な柄シャツの襟をつまんで胸元に風を送りながら聞いた。

「野球チームでおれが一番だった」

小学生の仲宗根が得意になって言うのと、

「アバおや また」

おじさんは鉤鼻をくんと鳴らして肩を揺すって笑った。煙草を深く吸い込むと、首をひよいと傾け、唇をちよつと尖らせて引き戸の間に煙をぼっ、ぼっ、ぼつと吐いた。

港で荷揚げの仕事をしていた源おじさんには、どこか世慣れた遊び人のようなひょうひょうとしたところがあった。

「馬鹿者 プリムヌ。子供のくせに ヤラビガマヌ」

刺身に醤油を回しかけながら父親が怒ったような口調で言った。けれどその唇の端は、まんざら不機嫌でもなさそうに緩んでいた。

おじさんはそんな父親を一瞬見て聞いた。

「恵達も、大きくなったらおとうのあとを継いで洗濯屋になるか」

六つの工程からなる上布製作は分業で行われ、祖父や父親のように織って染め上げられた布を洗いにかける職人を「洗濯屋」という。

「おれはならん」と仲宗根は首を振った。

「じゃ、なんになるか」

「野球選手」

胸を張って答えた。

「ダイズたいへんまた、長嶋なるつもりンナラなラなッなティなーナな」

おじさんは笑って、刺身に箸をのばして口に入れ、「ンなマなサーなヌな」とさも美味しそうに首を揺らした。その晩の刺身は、母親が自分の実家の池間からもらってきた新鮮なグルクン（タカサゴ）だった。それを肴に一杯やろうと父親が連絡して、おじさんは泡盛の一升瓶を手にやってきたのだった。

もの心がついた頃から源おじさんはあたり前のように家に出入りしていた。けれど、父親の飲み友達というだけで、それ以外の二人

の繋がりについてはまったく聞かされていなかった。母親からそれを聞いたのは、父親が亡くなったあとのことだった。

父親は心筋梗塞で突然逝ってしまった。家の裏の自分の仕事部屋で事切れていたらしい。その時、仲宗根は二十一歳の大学生だった。

元気に空を泳いでいた凧の糸が突然切れて、ふつりと消滅してしまったかのような思いは、母親にとっても同じだったのだろう。

「まだ父ちゃんがいるみたいな気がして、今でも裏に回って見たりするさ」

初七日の晩、そんなことを口にした。

親戚や客は帰ったあとだった。仲宗根は一人残った源おじさんに「クマンビジここに座れ」と手招かれて父親の場所に座っていた。

主あるじを失った家の中は、ぽっかりと穴があいたようにがらんとしていた。線香のにおいに、持ち前の威勢の良さが影をひそめたおじさんのくゆらす煙草のにおいが、湿っぽくまじつ

ていた。

「あ、そうだ。そうめんのおつゆ、たくさんあるから食べる？」

急に用事を思い出したように母親は聞いた。

おじさんは腹をさすって「クイシージョウブン<sup>これで十分だ</sup>」と酒のコップを掲げてみせた。仲宗根はもらうことにした。忙しく動き回ってまとまった食事をしていなかったので小腹がすいていた。

台所に戻る母親が、父親の仏壇にちらりと眼をやった。まだ還暦にもなっていないなかったから、写真館で撮った正装のやつがなくて、その年の織物組合の新年会の集合写真を引きのばして額に入れてもらったのだった。

朋美が運んできたそうめんを啜りながら見ると、おじさんは引き戸の間から夜の外を眺めていた。室内から漏れるうす明りの中で、霧のような晩秋の雨が降っていた。

「恵達、どうするべきか？」

源おじさんは顔をこっちにむけて聞いた。

煙草をくわえたくぐもった声は、どこか父親

の声に似ていた。だからだろうか、そのひと  
言で、洗濯屋になるかどうか聞いているのだ  
と理解できた。その日は、織物組合の方から  
も後継者不足について聞かされ、父親のあと  
を継ぐように説得されていた。

組合の方には、大学を卒業したら教師にな  
るつもりでいると言いながらも、その熱心さ  
について気を遣って、自分の意思をはっきりと  
伝えられずなんとなくやむやに流れてしま  
ったのだった。そのやり取りをそばで聞いて  
いたおじさんから「どうするべきか」とあら  
ためて問われて、返事に困って眼の前の骨ば  
った顔を見ていた。

二代続く家業を継ぐ。それについて考える  
ことはあった。いずれは洗濯屋に、という気  
持ちもどこかにあったように思う。しかしそ  
の時は、思いがけずそれが急に肩にのしかか  
ってきたおかげで戸惑っていた。

箸を宙でとめたまましていると、おじさんは  
ふっと頬を緩めた。煙草を灰皿に揉み消し、



それから仲宗根を見据えておもむろに口を開いた。

「なる人は、どうやってもなるさ。ならん人は、どうノッやシャってマイもならん。ウ運ン命ミさい、ウ運ン命ミ」  
なぜそんななぞめいたことを言うのか、その時はわからなかった。

四合瓶の底の泡盛をコップになみなみと注いで、すこし辛そうに頬を歪めて飲み干すと、おじさんは空からになった煙草の箱をしぼるように捻じり込んで飯台に置いて席を立った。

「恵順、ウおワ前ガのム分テイもマイ飲ヌんターだバか、ピ帰ラるットぞ」  
父親の遺影に手を合わせて、目の前の飲み友達に語りかけるように言った。

仲宗根は玄関まで送った。台所から母親がぱたぱたと出てきてすすめる傘を「ジ大ョ丈ウ夫ブンだ」と断って、源おじさんは冷たい雨の外へ出て行った。

縁側に戻ってビールをちびりちびり飲んでみると、朋美がコップを手にやってきた。

「私も飲もうかな」

コップに一杯注いで朋美は半分ほどあけた。  
「アガイ、あんたいつからそんなにビールを飲むようになったわけ。父ちゃんに見られたらダイズ怒られるべきさ」

ふきんを手に母親が呆れたように言った。  
「ごめんね、父ちゃん」

朋美は仏壇のほうに顔をむけてすこしおどけた調子で言つて、ちろりと舌を出した。その頃、姉是那覇の美容室で働いていた。  
「父ちゃんが若い頃に、宮古から逃げようとしたこと、知ってるよね？」

ねじり込まれた煙草の箱を灰皿に落して、どちらに聞くとともになしに母親は聞いた。

「ああ」と仲宗根がうなずいた。大人しい父親の起こしたその「遁走事件」は、親戚の間で語り草になっていた。

子供の頃から絵を描くことが好きだった父親は美術の道に進みたかつたらしい。父親が高校の時に描いた、東平安名崎へんなのスケッチが一枚だけ残されている。仲宗根が見てもなかなか

かのものだった。

祖父はしかし、美術はおろか、島を出ることにすらも許さなかった。高卒後はすぐに本格的に洗濯屋の修行に入れと厳しかったのである。そんな祖父に反発して、卒業式の数日後、父親はバッグひとつで那覇行きの船に飛びのった。バッグには着替えや搔き集めた現金、それに、中に収まりきれない上布の反物がチャックからはみ出して差し込まれていた。祖父が仕上げた、その七宝紋の上布を父親は何かあったら売るつもりでいた。

最終の行き先は仲の良い友達が就職した大阪と決めていた。けれど父親は、その住所の記されたメモをなくしてしまったのだ。気づいたのは、船が平良ひらら港を離れたあとだった。翌日の早朝、泊港に着いた。国際通りをあてもなく歩いていると年上の男が声をかけてきた。男は偶然、同じ宮古の人だった。父親は誘われるままに通りの食堂に入った。事情を知って男は、自分の部屋に泊めてやろうと

言った。財布を出して二人分の食事代を払いながら男は、自分の家まではすこし歩くことになるから先に便所に行ってくるようにと言つて、父親からバッグをあずかった。便所は店の裏手のすこし離れた場所にあつた。用を足して戻つてくると、男はバッグごと消えていた。途方にくれた父親はコザの親戚のところまで徒歩で行つて、帰りの船賃を借りて島に戻つてきたのだった。

「国際通りの食堂でバッグを盗んだ男。父ちゃんに言うなと言われてたから今まで黙つてたけど、源おじさんだったんだよ」

仲宗根は手のコップをあやうく落しそうになつた。朋美はなぜか飯台を叩いて笑いこぼげた。衝撃的なその事実を明かした母親が、平然と飯台のものを下ろしてふきんをかけるのを見ているうちに、なんとも言えない可笑しみが込み上げてきて、しまいには仲宗根も声を上げて笑つていた。「ウンミ運命さい、ウンミ運命」  
と言う、真面目くさった顔をも思い出してま

すます笑いを強くした。

雨足が強くなったのか、しずくがぽつりと飯台を濡らした。

その後、どんな経緯いきさつがあつて二人はこの飯台を挟んで酒を酌み交わす間柄になつたのだろう。源おじさんは七宝紋の上布をどうしたのだろう。質屋にでも持って行つたのだろうか。その布は今、どこにあるのだろう。窓を閉めながら、そんなことを考えていた。

「嫌だねえ、雨は」  
濡れた窓ガラスを見ながら、母親がぽつりと漏らした。

閉め切つた室内に煙草のおいはもうなく、線香のにおいが、まるで故人のくゆらす煙草の香のようにたゆたっていた。

車に戻ると、木麻黄の木立から漏れた遅い午後の陽がシルバーのボンネットの上で眩しく揺れていた。那覇の中古車センターで「教頭先生らしくて、これがいい」と、このセダ

ンを選んだのは妻だった。

この四月に教頭になって母校の中学校に単身で赴任した。しばらくは実家から通っていたが、帰宅時間が不規則なのと、通勤の便を考えて今は学校近くのアパートに住んでいる。二十五年振りの一人暮らしは新鮮ではあるけれど、夜は時間を持って余し気味だ。おかげで、自宅に持ち帰ってやる仕事の量が増えた。

源おじさんの家の前を通ると弔問客はもう誰もいなかった。ペンキのくすんだ古家を横目で見ながら、おじさんはここから実家にきていたんだな、と仲宗根はしみじみ思った。

教師になることはウンミ運命だったのだろうか。ほんとうは洗濯屋になるウンミ運命だったのではないか。ものを作るのは好きだ。父親ゆずりで美術の成績も良かった。

だが、教職についたことは後悔していない。仕事は、それがあたり前だと思って自分なりにまじめにやってきた。

腕時計をのぞく。まだ五時だ。

学校に戻ってひと仕事しよう。来週早々に県の教育委員会が視察にやってくる。そのための資料作成をしなければならぬ。きょうは、PTA役員との会合と、そのあとの飲み会も予定されている。本島に比べて父兄との酒の付き合いが多いことに最初は驚かされた。きょうはまだ、これからだ。

水しぶきの中に小さな虹ができていた。

「おはよう」

正門のプラントーに水をやりながら、登校してくる生徒に挨拶を返す。仲宗根が植えたボタンは、一昨日あたりから赤と紫の花を咲かせていた。

毎朝の水やりが終わって、ホースをドラムに巻き上げているとあくびが込み上げてきた。最近、うまく睡眠がとれない。ゆうべも十時に寝に入って夜中に目が覚め、それから眠れないまま結局、ベッドの中で朝までもんもんとしていた。

職員室の自席でパソコンを開いた。  
さあ、きょうもやるぞ、と気合いを込めて  
思う端に「頑張りすぎじゃないか」。もう一人  
の自分の声を聞いた気がして苦笑いをかみ殺  
した。  
頑張っていないとどこか不安でしようがな  
い。忙しさにまぎれているうちは、それを忘  
れることができる。だが、どんなに頑張つて  
も若い頃のような満足感や達成感が得られる  
ことはない。それどころか、些細な失敗を思  
い返して気がついたら後悔ばかりしている。  
ネットで検索したら、このようなことも、ス  
トレスからくる睡眠障害とやらも中期には  
よくある症状らしいが、そんな自分にどうに  
も納得がいかなかった。パソコンのキーを叩  
きながら、思わずため息を漏らした。  
昼休みのあと、二年の女子生徒二人を引率  
して、地域を知るための職場体験の面接のた  
めに「宮古島市伝統工芸品センター」に出か  
けた。担当の職員が研修で島外に出ているの



で仲宗根がかわったのだった。

生徒を学校車の後部シートに乗せて校門を出る。「伝統工芸品センター」は、宮古上布の織り工程の見学、織物製品の販売などを行っている。父親が健在の頃は、平良港の近くにあつて幾度が行ったことがあつたが、上野地区に新築移転してから訪れるのははじめてだった。

県道に出てしばらく行くと赤信号にひっかかった。ハンドルに手を置いて幼い頃のある夏の日のことを思い出した。

父親に三時のお茶を供する母親について裏の仕事部屋へ行くと、開かれた南の窓にそつて壁から壁に這わされたロープに濃い藍色の布が幾重にも往復して干されていた。

「カギーカギヌ、とつてもきれいなジンダマヤ錢玉だね」

五円玉のような錢玉ジンダマの模様が規則正しく並んだ、その布を眺めて母親が感嘆した。

その時客の呼ぶ声があつて、母親は盆の湯

呑みを畳に置いて急いで戻って行った。母親は自宅の一角で美容室をやっていた。

仲宗根は残って父親の作業を見ていた。

部屋は、六畳の畳間と二畳ほどの広さの板間からなっていた。父親は畳間より一段下がった板間で、自分の尻の半分ほどの四角い籐椅子に座ってアイトウ（木槌）を振っていた。洗濯屋は、洗った布を陰干したあと、アイトウで叩いて極限まで薄く均等にのばす。この「砧<sup>きぬた</sup>打ち」という作業は、上布製作の重要な最終工程だった。

布を打つ重たい音は部屋を揺らし、窓から流れ込む蟬の声をはじめ飛ばした。長方形の琉球松のスタビザ（砧台）に広げた布に、四キロのアイトウの遠心力をうまく利用して両手で打ち下ろす職人の無駄のない所作は、子供の眼にも巧みに映った。

一反を、宮古上布の特長である、透き通った蟬の羽のような薄さにまで仕上げるにはアイトウを二万回以上振らなければならず、

優に十時間はかかる。長年の洗濯屋稼業で鍛えられた父親の上半身は、首の付け根から腰のあたりまで大きな亀の甲羅のように盛り上がっていて、両肩のあたりにソフトボールでものせたようだった。

父親が動きをとめた。部屋が静かになると蝉の声が大きくなった。職人はアイトゥーを脇に置いて、布が均一にのばされているかどうか確かめるために、首をすこし斜めにして手のひらで表面を撫でさすった。その様はまるで、蝉が鳴くときに震わすかな羽音に耳を澄ましているかのようにだった。

頭に汗止めの手拭いをまいた黒ぶちメガネの四角ばった顔が、ふいにこつちをむいた。

仲宗根はなぜか背筋をのばしていた。

父親はにっこりと笑って湯呑みを指差し、

「ムチクウ持ってこい」と息子にやさしく声をかけた。温かい湯呑みを両手で包んで持って行くと、父親は畳に上がってあぐらをかき、その中に息子を座らせた。大きな体に、父親のにおいに

背中からすっぽりと包み込まれた。

頭の上でお茶を啜る音がした。しばらく父親は無言で湯呑みを口に運んでいた。仲宗根はゆったりとした気持ちで身をゆだねていた。

柔らかな風がジンダマ銭玉をそよそよと揺らす。

「ナビガース蝉ヌ羽パニの、ンナマカラヤこれからだな」

ふいにひくい声が聞えた。それは、蝉の声にとけていった。

まだ砧打ちしていないジンダマ銭玉を見て父親はそう言ったのだろう。仲宗根が首をそらせて見上げると父親はうなずき、両手で息子の膝を深く折って、丸めるようにして抱え上げた。

「重くなつたな、恵達」

左右にゆっくりと揺らされながら眼を閉じてみると、体が軽くなって宙に浮いたようだった。

蝉の声がだんだん近づいてきた。自分が今、一匹のナビガース蝉になって大空を浮遊しているようで、少年の胸が弾んだ。

「伝統工芸品センター」には、三十分ほどで到着した。赤瓦の屋根と琉球石灰岩でできた建物は、三方を木々に囲まれ、表の駐車場の前の道路のむこう側には砂糖キビ畑が広がっていた。冷房の効いた車を出ると、降り注ぐ太陽の熱に襲われた。生徒の一人が堪りかねたように、「あちー」と声を上げた。

センターの自動ドアを入ると天井の高い横長のロビーが待っていた。平日の館内はシンとしている。程良い照明や窓からの光が落ちて着いた雰囲気を醸し出していた。

受付の女性に来意を告げると「すこしお待ち下さい」と言って、事務室に入って行った。

館長の赤崎は、仲宗根よりいくつか年かさの小柄な女性だった。

「よろしく願います」

仲宗根が頭を下げると赤崎は会釈を返した。

目尻に人のよさそうな皺を作って、「こんにちは」と生徒たちに笑いかける。生徒たちは声を揃えて挨拶を返した。ここから先の面接

や日程の相談などは、受け入れる側の職場と生徒だけでやることになっている。

「先生、待っている間、館内をゆっくり見学して下さい」

赤崎は生徒たちをともなつて事務室に入つて行った。

ロビーには、着物や反物が壁に吊るされたり、ガラスケースに収められて展示されている。かつては毎日のように眼にした上布だった。眺めながらどうしても懐かしさが込み上げてくる。説明書を読みと戦前からのものもあるから、この中にはもしかすると祖父や父親が手がけた布もあるかもしれない。そう思いながら丁寧に見て回った。

祖父の恵正は、戦争で途絶えていた上布の復興にたずさわった職人のひとりだ。自分の上布が、ベルギーのブリュッセル万国博覧会で賞をもらったことが自慢だった。

最後まで見てロビーを離れた。父親が島から持って出たのと同じ、七宝紋の上布は見あ

たらなかった。

奥へ伸びる廊下沿いに、上布作りの工程に従って部屋が並んでいた。ドアが大きなガラス張りになっており、見学者に中のようなすが見やすいようになっていた。最初の部屋では、中年の女性が三人、熱心に苧麻ちよまの糸を撚っていた。上布一反を作るためには約三十キロメートルの糸が必要だと、父親が話していたことを思い出した。

順路に従って見て行く。途中の壁に、古い写真などと並んで宮古上布の歴史が記されたプレートが掲示されていた。

歴史は十六世紀にまでさかのぼる。稲石いないしという女性が宮古上布のはじまりとされる「綾あや鑄布さびふ」を織って国王に捧げたことで首里王府に広く知られるようになった。稲石の夫は、その功によって栄華を得た。しかしそれ以降、貢納布こうのうふとなった上布を織って献上するため、多くの島の女性たちがひどい苦勞を強いられることになった。

宮古上布には、人の頭の数だけ税を納めねばならなかった人頭税の時代の長く悲しい歴史が織り込められているのだ。

すこし緊張しながら、砧打ちの部屋をのぞいた。明かりが消えている。とくに見たい部屋だったので肩すかしを食わされたような気分だった。カーテンの引かれたうす暗い部屋は、父親の仕事場と同じように畳間と一段下がった板間からなっていた。

突き当りの大きな部屋から音楽が聴こえる。テンポの遅い、重たげなロックだ。

その部屋には、窓に沿って機織り機がずらりと据えられていた。まるで格納庫に並べられた超小型の飛行機のような。音楽に近づいて行くと、若い女性がひとりだけ一番奥の織り機を動かしていた。色の白い、ひと目で本土の女性とわかる面立ちをしている。頭に派手な柄のバンダナを巻いて、Tシャツにジーンズという彼女の体の動きが、妙にロックのリズムに合っていた。けれど、強い違和感を



覚えて、すぐにそこを離れた。

宮古民謡ならまだしも、ロックとは……。

廊下に戻ると「先生」と声をかけられた。

赤崎だった。

「生徒さんたち、事務員と日程の調整をしています。もうすこしかかりそうです」

「わかりました」

ちようどそこに、先ほどのバンダナの女性が出てきた。

「あら新藤さん、休憩？」

赤崎は気さくな感じで声をかけた。

「ちよつと疲れたので、外の空気を吸ってきまーす」

「彼女、すごい頑張り屋さんで、とても研究熱心なんですよ。彼女のような人材が、もっとたくさんいてくれたらいいんですけどね」

両手をぐるぐる回しながら、スキップするようにロビーのほうへ行く女性を見ながら赤崎は言った。

「でも、ああいう音楽を聴きながら、という

のはどうですか？」

音のほうに軽く顎を振って仲宗根はやんわりと聞いた。長い苦難の歴史を経て現在に至る宮古上布は、それにふさわしい環境で作られるべきだ、という思いがあった。

「んー」と一度うなずいて、「いいと思いません。私は」

赤崎はきっぱりとした口調で言った。

「そうですか？」

「ええ。宮古上布というと、人頭税に苦しんだ女性たちのことが強調されがちですが、私はそれだけではいけないと思うのです。私は、工芸品としての純粋な上布のすばらしさを世界中の人にもっと知ってもらいたいと思っていきます。そのために、島内に限らず若い人が新しい感性でどんどんこの世界に入ってきて裾野を自由に広げて行ってほしいのです」

言い終わると赤崎はまた、仲宗根にうなずいてみせた。

ひと言ひと言区切るように語ったその言葉

のうちに、上布にかける深い情熱を仲宗根はくみとった。自分自身、どこかで暗く悲惨な島の歴史と重ね合わせて上布を見てきた。今ふいに、新しい風に吹かれたような清々しさをかんじた。

「生徒らにもぜひ、そのことを伝えて下さい」言葉にすこし力をこめて仲宗根は言った。

「わかりました」

赤崎は笑顔を浮かべた。

館長は気を遣って休憩室を開けてくれた。会議用のテーブルにパイプイスがそえられている。赤崎は流し台の上の魔法瓶のお湯でお茶をいれる。すすめられたイスに座って待っている、小柄ががちりした体躯の年配の男性がのっそり入ってきた。

「館長、<sup>わし</sup>バンにも<sup>お茶を</sup>チャ<sup>を</sup>ユフカ<sup>い</sup>シ<sup>れて</sup>フィール」

「あら伊計さん、今日はひ孫の<sup>命</sup>ナ<sup>名</sup>ー<sup>名</sup>フイ<sup>ー</sup>祝いだっただんじやないですか？」

「夜が待ちきれんで孫の<sup>家</sup>ヤ<sup>ー</sup>に行っただが、来週だった」

伊計は笑って、仲宗根の前のイスを引いてどかりと腰を下ろした。赤崎は「あーあ」とわざと大げさに呆れたような声を上げて、仲宗根の前にお茶の湯呑みを置いた。

「伊計さん、こちら中学の仲宗根先生。職場体験でうちにくる生徒を引率してきたんです」

仲宗根は伊計に会釈した。

「アンチー<sup>そ</sup>か」と伊計は猪首を揺らした。

「伊計さんは、砧打ちの職人さんなんですよ」

「洗濯屋ですか」

仲宗根は思わず口にした。

「そう、洗濯屋。先生、よく知ってるな」

「祖父と父が洗濯屋だったんですよ。二人とももう亡くなりましたけど」

「あら、そうだったんですか」

赤崎が驚いたように言った。

「仲宗根、と言ったな？」

伊計はすこし鷹揚な感じで聞いた。

「ええ」

「仲宗根恵順？」

「父です」

そう口にした瞬間、なぜか鼻の奥がつんとなった。センターに入館してからずっと自分が、どこかで父親の面影を求めていたことに気づいた。

「恵順の長男？」

「そうです。恵達といいます」

「じゃ、恵順が亡くなった時わしバンと話したな」  
仲宗根も思い出して「ああ」とうなずいた。

父親の初七日のとき、跡をつぐように熱心にすすめたのが、この伊計だった。

「その節は、どうもありがとうございます」  
イスからすこし腰を浮かして頭を下げた。

「知り合いだっただの。ゆっくり話して行ったらいいですよ。先生、終わったら声をかけましょうね」

伊計のお茶を置いて、赤崎は部屋を出て行った。

「せっかくすすめていただいたのに、結局教師になりました」

「アンチドーリヤそのようだな」

伊計はからりとした口調で言つて、湯呑みに手をのぼしながら笑いかけた。

思いがけず父親の職人仲間に来て、すこし興奮していた。自分の知らない父親を知りたいという気持ちがふいに湧いてきた。だがそれをどう切り出そうかと考えながらお茶を飲んでみると、伊計が口を開いた。

「先生も、恵順と同じで真面目な性格らしい」「いや、そんなことはないですよ」

「見ればわかるさ。恵順の口から女や遊びの話が出たことはなかった。酒を飲みながらも仕事のことだけスグトウヌクトウチャーヤン考えておつたよ」

「そうですか。でも、父が仕事のことを私に話すことはほとんどなかったです。伊計さん、もしよろしければ、父のことで何か憶えていることがあつたら聞かせてくれませんか」

仲宗根はすこし顔を近づけて言った。伊計はすこし考えてから、ゆっくりとした口調で話はじめた。

「恵順のドウス友人に、下地源位がいただらう？」

「……ええ」

いきなり源おじさんの名前が出て、戸惑いながらうなずいた。

「恵順に、あれの女がやっているスナックに連れて行かれて、飲んでいるうちに奥から反物を持ってきてな、カウンターに広げて『自分にはこれ以上の仕事ができん』と言っておった。恵順の、暗く沈んだ、あの姿が今でも忘れられんさ」

「いつのことですか？」

「あれは、亡くなるすこし前だった。あの布は、並みの職人の手がけたものじゃなかった。誰が打ったものかと聞いても、恵順は黙っていた。アスウガバンだにはわかっていた。あの七宝紋を打ったのは、仲宗根恵正。先生のおじい。わしバンには、そうとしか考えられなかった」

仲宗根は息を飲んだ。その七宝紋は、源おじさんが国際通りの食堂で父親から盗んだものに違いなかった。

「アスウガだけど、なんであの店にあつたのか。店のものでもないようだったが……」

伊計は首を傾げた。唇を尖らせて湯呑みのお茶を啜って旨そうに飲み込むと、

「恵順は絵心もあつたから、新しい図案もいろいろ考えているようだったな」

と遠くを見るように目を細めた。

父親が作りたかつた上布とは、いったいどんなものだったのだろう。宮古上布の裾野を世界に広げたいという赤崎館長のように、新たな上布作りを目指していたのだろうか。

そのことについて深く知りたいと思った。

だが、七宝紋のことがどうしても気になつて訊ねようとすると、

「先生は、おじいに似ているか？」

仲宗根の顔を真っ直ぐ見て伊計は聞いた。

「ええ、よく言われます」

「カーギ顔つきは、ウヤ父親には似てなかつたよな、恵順。性格も恵正が剛なら、恵順は軟。親子という

より、二人はバンわしが見たところ、職人の先輩



後輩のようだった。ウヤ父親のことを話す時の恵順はいつもぴりぴりしとった」

たしかに、祖父と父親は互いに一步踏み入れないようなところがあつた。

職人の先輩と後輩……。他人の眼にはそんなふう映つても不思議ではなかつたかもしれない。親戚の中には、祖母が病弱で父親はほとんど曾祖父母に育てられたからだという人もいた。それもあつたろう。しかし、その根の中心には、自分が島を出ることすら許さなかつた、祖父に対する父親の反発があつたように思う。

生徒が呼びにきて休憩室を出た。駐車場へ歩きながらふと見上げた空の雲が、大きく羽を広げた巨大な蟬のようだった。

ナビガース蟬は、風にゆっくりと流されていた。

仲宗根の車は平良の目抜き通り、西里通りを抜けて平良港の近くの、通称「イーザト西里」と呼ばれる歓楽街に入った。

飲み屋の看板に挟まれた一方通行の道路をすこしずつくねりながら行く。昼間のイーザト<sup>西里</sup>は人も車もほとんど通らず、野良猫がわがもの顔で闊歩していた。長さ一キロほどの道路には、やつと車が一台通れるほどの道が何本か枝分かれしており、マッチ箱のような建物が看板を掲げてひしめき合っている。

古い雑貨屋がある角を右に曲った。伊計の記憶では、そのスナックはこの枝道のどこかにあつて、源おじさんの女だというママの名前がついていたらしい。

左右の看板に眼をくばりながら車をゆつくりと走らせる。それらしい看板が見つかったら夜にまたくるつもりだが、はたしてあるだろうか。何しろ三十年も前だ。看板が剥がされた店が何軒か眼についた。このうちのひとつがそのスナックだったのだろうか。胸に不安がよぎる。港にむかつて緩やかに下る短い道の出口はすぐに見えてきた。女性の名前らしい看板は見つからないまま環状線に出た。

伊計の記憶が間違っていたのだろうか。まだ諦めきれない気持ちの中で思った。しかし、角の雑貨屋で父親が行きがけに煙草を買うのを、伊計は外で待っていたらしいからそれはないだろう。

夕食に作ったカレーライスは、ずいぶん水っぽくなってしまった。スープのようなルーをスプーンですくって啜る。皿に当たるスプーンの音が、静かな部屋で耳障りなほど大きく響く。一人の食卓をこれほど侘びしくかんじたことはあっただろうか。

父親の洗濯屋としての人生に、あの上布は深くかかわっていたのだ。あの布がなければ、おそらく父親と母親の出会いはなかった。家族のはじまりももちろんない。取り戻すことはできなくても一度でいいからこの眼で見てもたかった。そんなことを深く考えれば考えるほど、やり場のない虚しさはつのった。

半分も食わずにスプーンを置いた。このま

までは眠れそうにない。氷を入れたコップに泡盛の水割りを作った。コップを口に運びながら、どこかの店のカウンターで酒を飲む父親の姿が浮かんだ。

イーザト<sup>西里</sup>のあの枝道には、何軒の店があっただろう……。十五軒。二十軒。いずれにしてもすべて回れない数ではなかった。ひと晩では無理だろうから、幾晩かかけて一軒ずつしらみつぶしに入って、下地源位と関係のあった女性のことを尋ねて回ればなんらかの情報が得られるかもしれない。

眼の前がぱっと明るくなった気がした。急いで身支度をしてアパートを出た。表でタクシーを拾ってイーザト<sup>西里</sup>へむか寄せた。

看板に明かりの灯った夜のイーザト<sup>西里</sup>は、昼間とはまったく違う顔をしていた。飲み客や表で客を引く夜の女性たちの間を縫うようして、タクシーはガラガラとした熱気に満ちた繁華街を進んだ。雑貨屋の角で車を下りて枝道に入った。ねっとりとした夜気が体を包み込んだ。

だ。辺りには人いきれとアルコールのまじったような独特な空気が漂っている。

若いホステスに呼び止められた。看板の明るい、新しそうな店の前に彼女は立っていた。まずは、古くからやっついそうな店をあたるのがいいだろう。女性の前を素通りする。次の店は閉まっているかと思っただが、看板がうす暗く灯っていた。「やま川」とぼんやり浮かび上がっている。それを眺めているうちに「山川」という文字がふいに眼前に現れた。はっとなった。伊計の記憶に残っていた、店のママの名前というのは、「山川」という苗字だったのではないか……。

はやる気持ちを抑えてドアを引いた。古めかしい内装の店内は、スナックにしてはひどく明るかった。右手にこげ茶のデコラ貼りのカウンターがあり、通路を挟んで左手がボックス席で、赤い布張りのシートが妙に雑然と置かれていた。カウンターの中に髪をパープルに染めた、部屋着のような派手な色

のムームーの女性が立っていた。

やせぎすの年配女性は意外そうな眼で客を見て「いらっしゃい」と言い、ひとりだとわかる。「どうぞ」とカウンターをすすめて、壁のスイッチを押して明かりをうす暗くした。

「こんな早い時間に入ってきたから驚いたさ」

女性はおしぼりを置いて厚化粧の赤い唇を緩めた。「何をあげようかね」と聞かれてビールを注文した。仲宗根が傾けるコップにビールを注ぐと、女性はお通しの仕度に取りかかった。冷えたビールは喉越しがよかった。

「山川というのは、ママさんの苗字ですか？」

仲宗根はさりげなく聞いた。

「そうよ」

女性はタップを開けながら答えた。

やはりそうだったか。胸のうちがじんわりと熱くなっていく。

「うちも飲んでいいかね」

豆腐チャンプルの小皿を置いて女性は明るい声で言った。仲宗根は女性のコップにビ

ールを注いでやった。

「にいさん、ここはじめてだよね？」

「ええ」

「松江です。はい、乾杯」

コップを合わせてきた松江には、長年この商売をやってきたゆとりがかんじられた。

「仲宗根です」

「仲宗根さんね。あつ、割り箸忘れてた。もう、最近なんでも忘れるさ」

松江は自分の頭をぽんと叩いて、声をあげて笑った。そのあけすけな笑い方は、内心の緊張を和らげてくれた。

仲宗根も思わず頬をゆるめた。

「下地源位さん、知っていますか？」

唐突かと思いなながらも、小皿のわきに割り箸を置く松江に仲宗根は訊ねた。

「源位はもう死んださ、あんた誰？」

急に陰を帯びた眼つきになって、松江は聞き返した。

「ええ、告別式に行きました」

「うちは行かんかった。人がいっばいるから。あんた、源位の子供じゃないよね？」

震える声で松江は聞いた。明らかに苛立っている。

「いえ。仲宗根恵順の長男で恵達といいます」

松江は一瞬驚いたような顔になり、アイシヤド―で黒く塗りつぶした眼で仲宗根の顔をまじまじと見た。

「にいさん、おとうにあんまり似てないね。

メガネもしてないし、髭もあんまりない」

「ええ」

「うちはまた源位の身内が今頃文句を言いにきたかと思ったださ。この店はあれの名義だったけど、死ぬすこし前にうちに移したから」

口紅のついたコップを手にそんなことを言ながら松江が、恵順の長男がなぜふいにきたのかと考えていることが見てわかった。

「父は、この店でよく飲んだらしいですね」

「しよっちゆうきてたさ。今にいさんがいるところにもいつも座って、源位がここ」



と、松江は仲宗根の隣のスツールにコップをむけた。

「実は、ここで父に宮古上布を見せられたという人がいまして、まだあるならぜひ拝見できなにかと思ってきました」

仲宗根が言うと、納得したように「ああ」と松江はパープルの頭を揺らした。

もしなかったとして、これも<sup>運命</sup>ウシミだ。仲宗根は一瞬思った。

松江は黙ってカウンターを出て、通路の突き当りのベニヤ張りの引き戸を開けて一段上がった部屋に入って行った。そこは昼間で鴨居に服が掛けていた。彼女はそこで寝起きしているらしい。

「こんなもの人にあずけて死んでからに<sup>大変</sup>ダイズな人。アガイもう」

戻ってきた松江はベージュ色の風呂敷包みをカウンターに置いて、誰に言うともなしにぶつぶつと文句を口にした。

仲宗根の胸の鼓動がはやくなっていた。

「開けて、いいですか？」

思わず声の上擦った。

「いいよ」松江は軽く答えた。

すこし震える手で包みをほどく。藍の地に、大小の円い七宝紋が見えた。三十センチほどくり出す。うすい明かりの下で紋様は、くつきりとではなく地に溶け込んでいるようだ。た。大と小は交互に並んでいる。円の内周を八つの半円形が囲み、中心にある菱形はよく見ると、それぞれ微妙に形が異なっていて星の形をも思わせた。手のひらで撫でると、冷たく感じるその上をなめらかにすべった。

ようやく再会できた、とでもいうような妙な懐かしさが込み上げてきた。頭の中で、さまざまな思いや記憶が交差する。しばらく感慨にふけていた。

「この上布をここに持ってきたのは、源位さんですか？」

やがて顔を上げて仲宗根は聞いた。

「そう。自分のヤ<sup>家</sup>にあったらしいけどね。

うちにくれるべきかーと思つて喜んだら、恵順からあずかつていたものだと言うからがっかりしたさ。前は奥の畳間もムヤイ（頼もし講）に使つたりしとったけど、恵順はその布を広げてずっとそこにいることもあつた。なくなつたらうちらの責任になるからはやく持つて帰らせ、と何回も言つたけど聞かんかつたさ、あの人。『恵順はンナマ今からスグリ人立派なになるべきだから黙つておれ』と強く言つて」

ここに置いてくれるように、父親が源おじさんに頼んだのだらう。持ち帰つたら祖父に返さねばならなかつたからだ。父親は祖父に内緒で家のどこかに隠しておけるような性格ではなかつた。

カウンターに肘をついて、引き戸の奥を眺めた。黒ぶちメガネの父親が七宝紋の上布を一心に見ている姿が浮んだ。父親がその中に見ていたものは、けっして祖父の技だけではなかつただろう。父親の胸のうちには、さまざまな思いが去来していたに違いなかつた。

松江はコップにビールを注ぎたして、空<sup>から</sup>になつたビンを掲げてみせた。仲宗根はうなずいた。

酔いで、頭の芯が重くなりはじめていた。気がついたら、明後日の月曜日からの仕事のことをあれこれ考えていた。職員との日程調整や地域との交流行事、授業参観……。

ふいに疲労感のようなものが降りてきて、重いため息がこぼれた。最近、ため息が多くなつた。つくづく思う。職員室で、何の理由もなく自分でも驚くほど大きなため息をはいて慌てて口を手で押えることさえある。

「にいさん、やっぱりおとうに似ているよ」

「えっ？」 仲宗根は松江を見た。

「今のにいさんみたいに恵順もドウ<sup>体</sup>を斜めにして肘をついて、源位がひとりでユンタク<sup>おしゃべり</sup>するのを黙って聞いていた」

泡立ちのいい新しいビールを注ぎながら松江は言う。実家の東の縁側での二人のようすを思い出して、思わず頬を緩めた。

「父は無口でしたからね」

「でも、たまに強く酔ったら『おれは死ぬまでバヤースンキヤー

洗濯屋』って急に大きなダイバン声を出したりしてたよ、恵順は」

「死ぬまでスンキヤー 洗濯屋？……」

「どういふことかノーテイヌクトウリヤア」と聞いても、うちには教えんかった。うちも強くは聞かんかったけどね。あの時分はいつもサゴクダイズ客が一杯で忙しかったし」

父親は酔いの中でつい、自分が美術の道に進めなかったことを嘆いていたのだろう。

……自分は死ぬまで洗濯屋をやるしかない。父親はそんな辛さをこころに押し込めてアイトウー（木槌）を振り続けていた。仲宗根は胸が詰まる思いだった。

「源位も恵順も若かった。あの時分が一番よかったねえ。うちはもうひとりさあ」

淋しげに言って、松江はコップに口をつけた。厚化粧の顔が急にひどく老けたように思えた。

「源位と恵順がはじめてここで会った時は、  
なんでか、どっちもウトウルスキミ怖そうパナなをしていた。  
二人で出て行くからノーテイヌどういうわけかバーガと心配した  
けど、忙しかったからそのまましておいたら  
戻ってきて。『バンおれがいいと言うまで、恵順  
からはジン金を取るな。ただで飲ませ』と源位  
が言っ、わけを聞いてもなーんも言わんで、  
朝までずーっと二人で飲んだよ。マーンほんとうにテイ、  
ノーテイヌどういうことだったのかねえバーヤーターガラ」

松江は首を傾げて不思議がったが、仲宗根  
にはその理由がなんとなくわかった気がした。

松江はほとんど問わず語りに、源おじさん  
と父親のことをしゃべり続けた。相槌を打ち  
ながらビールをすこしずつ飲んで、松江がお  
ごってくれた三本目が底をついたところス  
ツールを下りた。勘定を済ませて帰ろうとす  
ると、呼び止められた。

「この上布、持って帰らんね。これあんたな  
んかのものでしよう。うちが売って食べるわ  
けにもいかんし。またそんなことをしたら、

源位にダイズ怒られる」

「ありがとうございます」

松江が差し出す七宝紋をころよく受け取った。

「なくさんようにちやーんと持って帰らんと」  
まるで母親のように松江はやさしく言った。

「はい」と素直に返した。

「にいさん、またクウこいよ。うちも頑張こいつとくから」

泣き笑いのような顔に仲宗根はうなずいた。

父親の仕事部屋は、母親がたまに掃除や空気の入れかえをしているおかげで整然と片付いており、湿っぽさもなかった。

「こうなるウン運ミ命だったんだね」

畳に広げられた七宝紋の上布を前に正座して、母親はしみじみと言った。

南の窓から蝉の鳴き声が流れ込んでいた。ふと思いい立って、窓に這わされたロープに上布をゆるゆると巻いていった。陽射しが遮ら

れて部屋が陰った。畳に立膝をついて上布を眺める。スナックのうす暗い明かりの下で見ると、藍色は冴え冴えとして艶があった。紋様もひとつひとつが光沢の中にくっきりと出ている、全体で見るとやはり、大きな蟬の羽を思わせた。

「すごくきれい。おじい、すごかったんだね」  
朋美がため息まじりに言っつて、そばの母親に顔をむけた。

「そうねえ。でも、おじいだけじゃないよ。関わった人たちの上布作りにかける思いや苦労が溶け込んでいるんだよ、これには」

「そうだね」  
「それだけじゃない。むかしから宮古上布を作り続けてきた島の人たちの見えない手も加わっている。それがひとつになって、ここに  
あるの」

朋美がゆっくりと部屋を見回している。父親のことを思い出しているのだろう。みんなそれぞれ、この部屋には父親との思い出がつ



まっているのだ。

「おやじは酔うと『おれは死ぬまでバヤースンキヤー 洗濯屋』つて言ってたらしいよ。やっぱりおやじ、どこかで悔やんでいたんだろうな、おじいに島を出してもらえなかったことを」

ゆうべの松江の話进行い出して、同情するように言った。母親が小さくうなずいた。

「そうね。父ちゃんのころの中にはずっと、あつただろうね。母ちゃんにも何となくそれはわかったよ。でも恵達。父ちゃんは、なつたからには誰にも負けない洗濯屋を目指した。おじいもそれをわかっていて遠くから見ていたよ、いつも。恵正と恵順はほんとの親子じゃないみたいだ。っていう人もいたけど、そんなことはない。おじいから、父ちゃんは頑張っていたんだよ」

意外な気持ちで母親を見た。

「おじいの髪は、母ちゃんがいつも切ってたでしょう？」

「そうだったな」

月に一回、祖父はそのため母親の美容室にやってきた。

「その時に、家に父ちゃんがいたらここをのぞきもしなかったけど、いない時は黙って入って行って、出てきたら新しい灰皿を出さしてね、縁側で必ず煙草を吸うわけ。そしてね、父ちゃんが打っている布のことを独りごともたいに話して帰るわけさ。父ちゃんはおとからおじいの煙草の吸殻を見たら、なんとやうとったかーと母ちゃんに聞いてたよ。そんな日は、おそーくまでここにクマリテこもっていたさ」  
母親は唇を引き締めて七宝紋に目を戻した。  
「そういえば、私が夕飯だよって呼びに行ってもここから出てこない時もあったね」

朋美が思い出したように言った。

……死死ぬまで  
スinkyヤー洗濯屋。胸のうちでつぶやく。  
父親は諦めや投げやりな気持ちからではなく、それを口にすることで自分自身を奮い立たせ、洗濯屋としての自分を受け入れようとしていたのだ。今の仲宗根には、父親の心情

が痛いほどわかった。

パイカジ南風が、蟬の衣を揺らした。

「あつ、父ちゃんがきた」

母親がぼつりと口にした。

「ナビガースヌ蟬羽パニ、ンナマカラヤこれからだな」

風が連れてきたそのひくい声は、仲宗根の頭の上で小さく渦巻きながらとどまっていた。

あの夏の日、まだ砧打ちしていないジンダマ錢玉を見ながら父親は、いつの日かこの七宝紋を越え、自分の上布の世界を切り開くことを息子に誓ったのではないか。そう考えると無性にうれしい気持ちになって、小さく何度もうなずいた。

自分が教師になったのもウンミ運命。そこから先は自分自身にかかっている。静かに眼を閉じて、仲宗根も父親に誓った。

蟬の声が近づいてくる。

風が、体をふわりと宙に浮き上がらせた。

あの日のように、一匹のナビガース蟬になって、島の空をゆつたりと舞っていた。